

# 白金蔵

12月号



平成 26 年 12 月発行

第 46 号

## 白金葭定例句会案内

月例句会報 (14/12/19 8名欠 神楽、都鳥)

一月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三学習室 兼題:新年一般

二月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三学習室 兼題:山焼、鶯  
17:00 ~ 19:00 新年会(備前)

三月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題:斑雪はだれ、白子

### 新年一般の参考句(一月十六日分)

遠方に富士くつきりと恵方道

つなぐ手を離しお降り確かめる  
俳句など書いてつまらぬ賀状来る

万力に螺子のありけり去年今年

これやこの出雲の神の太き注連  
しゅんしゅんと湯の沸くおもい年新た

またもとの二人となりて雑煮喰ふ  
黒黒とだるまころがる大どんご

親離れの破れジーンズ年始の児  
女坂箱根駅伝男坂

糸瓜子規大根虚子や初明かり  
またなにかさびしくなりぬ初鏡

高橋和子  
こしのゆみこ  
後藤章

栗栖恵通子  
西登喜子

光吉高子  
磯田みどり

納富俊光  
藤原りくを

鳩胸を朝日にずらり百合鷗

都鳥言問橋を潜りたる  
都神楽の巫女の紺袴垂髪

松田ひろむ  
河野南畦

みかぐら  
すべらかし

格咲く路地行きどまる八日かな  
浅草寺詣で大学諸買つて

七ツ星禁裏の山に神遊び

桟橋やテープ舞ひ立つゆりかもめ  
御神楽や市中まちなかはジングルベル忙せはし

都鳥迷ひ入るなり神楽坂

追ひ越して積荷の鰐に見返さる

ごりら見て動物園の冬の坂

武藏野の昔見えたる里神楽

隅田川のネオン眠れぬ都鳥

光成高志

増田陽一

飯田孝三

備後神楽舞台溢るる大蛇かな  
義士の日や墓碑銘しるき七十七逝  
きじゅにゆく

飴なめて童陣取る里神楽  
神鶏の脚に環をはめ落葉踏む  
山けぶる伊勢茶畑に時雨降る  
人来れば人恋ふ声の都鳥  
里神楽庭囲ひて楽屋とし

光  
みち

枕して北より響く除夜の鐘  
ゆき平に酒を煮切りて雪催

松村幸一

切なさは人の子産んで雪女  
祝箸といふ粗品が又当たる  
劫火ありしこも忘れじ都鳥  
妻恋の募るばかりの年用意  
農荒れの神楽の姫の手なりけり

吉羽多美子

狐火が飛び火してくる里神楽  
本棚に「最後の將軍」冬に入る  
銀行員等銀河のような眼鏡かけ  
何を言う季語を忘れたカナリヤが  
負債ごと売りとばしたる火の見かな

青木啓泰

倉田紀子

豆腐屋に油の匂ひ霜の朝  
眠る山背に信玄の隠し湯に  
村長は笛の名手や里神楽  
隅田川良き名の橋や都鳥  
深川に深川めしや都鳥

大蛇おろちの尾破れて果つる神あそび

冬かもめ濡れゐて真白出雲崎

近江屋に手締の挙がる歳の市（羽子板市）

武者昭七

思ふ人のたより聞かばや都鳥  
都鳥言問橋を一つ跳び

篝火の紅に映えたり神楽面



## 銀行員等銀河のような眼鏡かけ

啓泰

掲句、直ぐさま、「銀行員等朝より螢光す鳥賊の『とく』（金子兜太）を呼覚ました。兜太さんは今月檀家寺で講演をした。この句は出なかつたけれど、青鮫の句を自解した。薄暗いところで螢光灯をつけて皆働いているのを以前見ていた螢鳥賊にそつくりと見て出来た句だ。掲句は彼らの眼鏡に螢光灯が映つて恰も銀河のような黒々した反射光が見える様を詠つたものだ。銀河の星々は天井の灯が連なつて映つてゐるのを見立てたのだ。銀行員を揶揄したものとは私は受け取らない。

## 大蛇の尾破れて果つる神あそび

紀子

もう二十年も前になろうか。信濃町から四谷駅に歩いてゐて、備後神楽がくるというポスターを見つけて、その日にお参りして掲句のような神楽の場面を見た。この神楽はなにしろ、須佐之男命が八俣の大蛇を討ち平らげたことにちなんでいるので動きが激しい。大蛇は竹ひごに和紙を貼り付けた、そう、青森のねぶたのような作り方で出来てゐる。大蛇が舞台上とぐろを巻いてのたうちまわると舞台に溢れるようになる。そのうちに尾が破れ飛んでしまつて終わりとなる。中七まで読んで神楽だなといきや「神あそび」と平仮名で切つてあるので、意

外性もあり、こういう軽い止めはそこまでの描写を強める効果があるようだ。

## 都鳥迷ひ入るなり神楽坂

陽一

都鳥こと百合鷗が神楽坂に迷い入つてきた。何処から来たのか。外堀どおりに面した神田川から逸れて神楽坂に迷い込んだのだ。おそらく花街の路地にまで迷い込んだのだ。「迷ひ入るなり」の主語は都鳥ならぬ陽一さんだと直感したが、それでも面白い。神楽坂がよく効いている証拠だ。固有名詞は由来を背負つた重い言葉だ。

## 隅田川良き名の橋や都鳥

多美子

隅田川の良き名の橋は、言問橋だ。その名の謂れば、伊勢物語にある「名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の歌である。この橋はゲルバートラスという三角に組んだ鉄骨を二つの橋脚から片持ち梁に持ち出して中央で繋げ大きなスパン（支点間距離）をとつたいわゆるゲルバー橋である。ゲルバー橋を言問橋と名付けたわれわれ日本人の奥ゆかしさを味わいたい。

## 里神楽笛ひようひようと風に鳴る

昭七

里神楽の笛がひようひようと風に乗つて鳴り渡り、又風の音も紛れてひようひようと鳴るのである。里神楽の有り様がよく描写されております。「里神楽庭園ひて樂屋とし」（みち）の句のような神楽でありますよう。

## 農荒れの神楽の姫の手なりけり

幸一

先の句の神楽はきっとこのような場面を見せてているのである。面をつけ舞う巫女の手は農作業で荒れた手でしょ。それを覆い隠すことなく舞っている。そういう手を見たことであつたと回想した詠嘆の「手なりけり」の切字がそれを物語つている。

## ゆき平に酒を煮切りて雪催

紀子

ゆき平は、土鍋の一種。厚手の陶器製で、蓋、持ち手、注ぎ口がついている。加熱が緩徐で保温性に富み、かゆ、おもゆをたくのに適する。塩を焼く器から起ころる名といわれ、在原行平が須磨で塩焼の海女と親しんだ故事にちなむという。鮒大根などのよく煮込む料理では酒味醤を入れて煮切りアルコール分を飛ばしてはじめて煮込みにかかる。酒を煮きつた鍋底と窓の外の雪催の寒々とした空気が対比されている。日本海側の生活が思われる。よく凝固した言葉からどのような生活を想像するかは読者に委ねている。これが俳句の骨法だ。

## 一句鑑賞

### 飴なめて童陣取る里神樂

みち

一読、昔、村祭りの場面が蘇る。子供たちは、早くから神楽の舞台前に詰めかけ、競い合つて席を占め合う。遅れ馳せの仲良し誰ちゃん、彼ちゃんを誘い入れ、まづ

飯田孝三

## 鳩胸の朝日にすらり百合鷗

高志

「鳩胸」は鳥類「反り胸」の具体的表象。鳩は身近でかな口誦がまた快い。

## 都鳥言問橋を一つ飛び

昭七

折りしも台東は言問橋に差しかかる。日頃、古典に親昵する作者である、束の間、思いは業平歌物語の風雅の境をゆく。と、突如、足元に立つ都鳥の羽音にハツとする。飛び立つのは欄干からでもいい。一つ「飛び」ならぬ「跳び」が面白い。とび態さまが目に見えるのだ。「飛び」、「翔び」では図にならぬ。瞬間、千幾百年の時空を一つ飛びに帰翔、目前の都鳥の行方を見やるのだ。幸一さんの互選評のように、橋上、行き交う足音に怖じ、羽打つのを見るのもいいだろう。歯切れよく、撥ね際や

は、ほつと一息。そういうえば、きまつて飴を口にしていたな。開幕を待つ上気した顔々々が目に浮ぶのである。

## 都鳥迷ひ入るなり神楽坂

陽一

兼題「都鳥」と「神楽」を詠い込んで練達。近年は都内の川が蘇り、海鳥が遡る。度々、お茶の水橋から都鳥の姿を見かける。神楽坂にも神田川沿いに飛来するにちがいない。同所は、古くから知られる色街どころ、迷い入るのは都鳥ならぬ千鳥足かもしれない。く「入るなり」の鮮やかな切り上げが軽妙洒脱、都鳥と神楽坂の交響がめでたい。

すぐ目に浮ぶからだ。むべ「鳩胸」と「百合鷗」の並唱が朝日に胸反らす「百合鷗」の連列を具<sup>つぶさ</sup>にもの見せる。橋の欄干でも、岸の手摺でもいい。読くだしの滑らかなリズムが「朝日にすらり」たち並ぶ「鳩胸」に一層照りを添えてやまない。

### 劫火ありしことも忘れじ都鳥

幸一

「劫火」は、先の大戦で東京下町一体を一夜に焼き尽くし十万余の命を奪つた空襲禍とさらに遡る関東大地震の災火。墨田川畔に佇ち、彩り映える塔明りや輝き競う街灯しを見やりつつ、過ぎし阿鼻叫喚の巷をふり返るのである。劫火に失せた家族知人や友達の顔々が目に浮び、思わず唇を噛む。そうだ、富田木歩が火中に落命したのもこの堤だ。敢えての、「ありしこと「を」ならぬ「も」に作者の抑情が滲む。

### 冬かもぬ濡れゐて真白出雲崎

紀子

佐渡を望む壮大な景色を負い、飛び交う鷗たちの白さが目に染みる。海は冬の荒波、座五「出雲崎」がでんと坐り、句格正しく、「濡れゐて」の情韻と情懷がいい。芭蕉の名句「荒海や」を連想させるのである。

### 深川に深川めしや都鳥

多美子

端的簡明、説明は要らない。「深川」の豊みよろしく、「や」のはたらきが見事。同義三連の感があるやも知れぬが、いやいや、巧まずぬけ俳句の面目躍如を見る。「深

川めし」は浅蜊汁をかけた丼飯、かつての漁師飯。「深川飯」ならぬ「くめし」の用字も「や」に連なり鷗の飛び姿と平仄が合う。（出句一覽掲載順）

（平26・12・22）

### 一句鑑賞

#### 切なさは人の子産んで雪女

幸一

#### 農荒れの神楽の姫の手なりけり

妻恋ひの募るばかりの年用意

#### 踏まえてるか。一句目は豪雪地帯に語り伝えられている伝説を

幸一さんの句にはいつも郷愁に似た静かな吐息がこもつていて。経てこられた人生の幾山河に対する郷愁であろうか。一句目は豪雪地帯に語り伝えられている伝説を

踏まえている。若者にひかれた雪の精靈が夫婦となり子

までなしながら去つていかねばならなかつたという哀話

である。上五の「切なさは」は座五「雪女」にまでかか

つていると読むべきだろう。愛し合つても所詮「ひと

は「ひと」、「妖精」は「妖精」であつてみれば別れはい

つかはくるだろう。それが切ない。一句目、「手なりけり」に驚きと感動がこもつてている。舞台で優雅に舞つた舞姫

はまだかで見ればなんと毎日の農事に荒れた手の持ち主

であった。「神楽」とは本来そういうものであつたのであらう。とすれば作者は本当の神楽に出会つたのである。

三句目。「年用意」は大掃除をはじめ新年を迎えるための

### 武者昭七

作業。新年を迎える準備に忙しい時期になると普段に増して妻恋の情が募るのは、今までいつも傍らに元気に立ち働く妻がいたからである。それが今病に伏す。片腕をもがれた以上の切なさに耐えて黙々と立ち働く姿が浮びます。

### 御神楽や市中はジングルベル忙し

「御神楽」は年末に宫廷で行われる行事で里神楽とは別。古式ゆかしい伝統行事の場を離れて一歩町中にでればけたたましいジングルベルの大洪水。これぞ現代の日本です。

### 里神楽筵囲いひて樂屋とし

なんとも懐かしく楽しい村のひと時。これこそまことの神楽というべし。樂屋覗く子供あり、おひねり飛ぶあたり。時には滑稽通り越した演目も。

### 深川に深川めしあり都鳥

「深川めし」はアサリのむき身とネギを味噌で煮込んで汁をかけたどんぶり飯。下町の伝統的な名物料理。庶民の伝統料理にかけたいかにも誇らしげな句調がいい。

### ハガキ句四十五報管見

飯田孝三

高志

はらはらと落花藏する山桜  
桜咲き満ち、今し、散り初める刹那をとらえて見事だ。  
「はらはらと落花藏する」は、読者を文理を超えた詩

孝三

境に誘う。即ち、措辞「藏する」の仕業である。「咲き満ちてこぼるる花もなかりけり」(虚子)より、深くないか。満開の桜の嵩に、「はらはら」、落花するさまを重ね、無量の哀感を散らす。虚実渾然、嘱目(ハガキ掲載写真)をぬけ、桜の本然に迫る。桜は、一本か準ずる一族。人工の改良種より、やはり山桜だ。ア母音とラ子音繰り返しのリズムが、又、いい。

左は大版歳時記掲載の数多の例句中から引く。

### 海手より日は照りかけて山ざくら

山桜白きが上の月夜かな

しきりなる落花の中に幹はあり

揚雲雀高きにありて争へり

「高きにありて」に位。格調の一句。揚雲雀の生態に詳しくないのだが、「争へり」は、空に囁りかわす揚雲雀をいうのだろうか。それとも、天に揚雲雀、地に人間のそれか。後者は無理だろう。囁りは、ひたぶる、恋と娶りの囁り。してみれば、まこと宣なるかな。金の延の棒一本仕立てならずんば、品格が腰折れする。いのちの奥底に觸れ、切ない。

### 臨月の人の喜ぶ大桜

敏子

うまい。「臨月」と「大桜」が響き合う。めでたい。「人」と「桜」の併称が奥深く、手をとり合い喜んでいるようだ。もうすぐ、満月のような赤ん坊が生まれるに違いない

蝉噪会三月二十七日布施弁天界限7句

## 歎行の一喝ひひき種物屋

ひらがなのやうな風くる水の春  
ノヨベレカリこち花粉症うき

シヨハナに花粉症らしきもの  
切株に坐つて行けといふ日永

日和得し一坪農園豆の花

揚雲雀高きにありて争へり

揚雲雀女はかりが見上げをり  
貝寄せやプリマヴエラこ峰ひこ子く

見客せぬにて、アリニシニに逢て  
花の枝觸れあふ空の薄にござり

吉高の大桜 (4/12)

はらはらと落花藏する山桜

臨月の人の喜ぶ大桜

1000

。その名は、木花之開耶姫か桜子か。大桜の「大」が

頗る大手柄。

ヨベルカーにも花粉症らしきもの

猖獗を極める花粉症が、遂に、重機の群団を席捲。と  
は言え、ブルードーザでは虚実の隙を塞ぎ、クノーノーでは

被膜をいくのは、なるほど、シヤベルカリ、

、ショベルカーだ。音調にもきめ細かな配意がゆきわ

「日永」が手練。おまけに、  
参つた。蕪村もびっくり、「  
揚雲雀女ばかりが見上げをり  
「女ばかりが」が勘所。男で  
その時、男達は何してたんだ  
勤行の一喝ひびき種物屋

「**二喝**」と「**種物屋**」のひひき合いがツボたが「**ひびき**」を言うか、言うまいか。

「ひらがなのやうな」がうまいが、類想があるかも。  
ひらがなのやうな風くる水の春  
裕子

日和得し一坪農園豆の花

情景が見え、心情が手にとれる。はて、「得し」を言う  
、水二郎。

か 悅ぶるか  
毎回、ご夫妻の句が印象的。お二人の作品は、後広が

りの立体構造。それぞれ独自の世界をもち、“ぬけ”てい  
る。哲也氏の近説は、初めてお目にかかった頃から、又、  
一段と微に敏く、句境が深まつた感じ。以外の諸氏作も、  
さすがのお手並み。ただ、措辞、発想に、往々、いささ  
か先蹤を抜け切らぬ憾みを覚えます。謝々。

平  
21  
•  
05  
•  
02  
（

(平  
21  
•  
05  
•  
02)

お便り広場（到着順、敬称略）

（\*お便り広場掲載の文面はそのまま入力してしまって変えておりません。）

先日は花束ありがとうございました。今日も壺をあふれてひしめき合いながら、凛と香氣を張っています。長生きはするものだと思いました。家内に見せてやれないのが、唯一の痛恨。先月と今月の屋根には、こんな\*文章を書きました。お読み捨ていただければ幸甚。以上お詫まで。たかし みち様 H26・11・24 幸一

（\*「屋根」十月号に「短夜」同十一月号に「サイン」と題して、友子夫人の療養生活を詳しく書かれた文章です。昨夜は一睡もできないなかつたといわれたのをアビスターでお聞きしたことがある。その所以を書かれてあるのが短夜であり、入院中の友子夫人に「やめ、やめ、やめ」と言いかけながら、幸一さんの水漬と涙とで頬をぬらされた夫人が聖化されたような穏やかな表情でしげしげと瞬いたのが許しのサインのように幸一さんには思えた、というのがサインである。私は思う。人生には是非はない。文章に定着された幸一さんの生活が即文芸作品になつていることを。）

白金葭十一月号拝受しました。卒寿見事な生活振りです。なんとか見習いたいのですね。編集後記全くすばらしいです。私のハガキは\*大幅に変えて非常に良く出来ているのに感謝感激しています。とにかく元氣でいます。柿木一本だけが甘くなりました。小粒なのが残念です。益々の御活躍を祈ります。（11・30 小山陽也）

白金葭 11月号の訂正版有難く拝受しました。種々の会合やら季語探訪の旅やら何かとお忙しいのに加えて会誌の編集発送まで細かい心づかいを頂き感謝感激しております。ご夫妻のご健康ご発展をお祈りいたします。次回を楽しみにしております。（12・4 武者昭七）  
拝復「白金葭」11月第45号を有難く拝受。感謝。

柴漬の上ゆく鯉や沼の冷え

陽一

田舎の有地川のダムの深みに笹竹の束を沈めて小魚や川海老を採取、捕獲する近所の農家の若き人。驚き感心して眺め、大人になつたら俺もやつたろうと思つていた頃のことを懐かしく想い出す。しかし、一度も実行することなく、大学は東京に進学し就職し、古里の田舎の生活や柴漬漁法のこともすつかり忘れていました。右の名句で想い出す古里の川や山や近所の人々のこと。郷愁に陶酔。次の一句。

植木屋の屋の一服賜日和

多美子

田舎の旧家の広い庭の築山と植木屋（庭師）の松の木などの手入れ、古い家の濡れ縁に腰をおろして和菓子との本茶の茶碗の載つた丸い木のお盆、白髪の老植木屋のタバコの一服。向いの畑の畔道の柿木の天辺には賜一羽。その高鳴きの一声。田舎の晚秋か初冬。長閑な田舎の風

景、平和な一時。老人のユートピア。さらにもう一句。  
**自然薯の穴はおおむね座棺なみ**

啓泰

木棺、石棺、甕棺、陶棺などを連想し、青森の三内丸山遺跡や千葉の加曾利塚、さらには古代エジプトのツタンカーメンの純金製のマスクなども連想。西行（一一一八一一九〇。七一歳没）の河南町の弘川寺から芭蕉（一六四四一六九四・五〇歳没）の大津市馬場にあるという義仲寺の各々の墓地や墓石まで連想。そして、我々の句も各々一句づつでも御影石に刻み込みその石碑を志賀直哉記念公園か手賀沼公園の一角にでも建立して観光スポットの色取りの一部にでも加えてはどうか。町興しの一端に協力とはならないのでしょうか。などと空想、妄想へと連想は拡大飛翔。右の啓泰さんの一句からついには妄想に陶酔感謝感謝。皆様のご健筆を祈念。敬白

光成高志様 河村博旨（青江由紀夫）（12.13）  
（H 26.12.16 PM 4:30 青木啓泰）  
お手数をおかけ致します。よろしくお願ひ申し上げます。寒さ本格、ご自愛下さい。

追伸・拙句に対しいつも好意評をありがとうございます。

（句会に間に合いませんでした。郵便配達遅延のため）

会費同封。古代と万年堂から粗品を送りました。年末もサボラせて下さい。とにかくボケが進みつります。よく居眠りをします。来年こそと思うのですが、な

かなか。皆様のよいお年とすばらしい句作りの年となりますように。（12.16 小山陽也）

今年一年大変お世話様になりありがとうございました。二年目の今年は蓮見舟や本郷台吟行句会、久しぶりに自転車に乗り、上州路を空つ風をうけて走った事等楽しい思い出ができた年でした。前回の句作で「人生は後半のし木の葉髪」と作りました。野球と人生は後半がおもしろいと聞いたことがありましたので・・。しかし、自分の身におきた事を思うと、おもしろいなどと言つてられないのですが、生かされた命ですから大切にしていこうと思つています。寒さもこれからが本番でしようからご身体をご自愛され良いお年をお迎え下さい。来年もどうぞよろしくお願ひいたします。（12.21 浅野正美）  
(正美さん、蒟蒻掘り取材後 大変な急病に襲われましたが、見事に克服され右の手紙を頂きました)

（お礼）例会ではお世話になりました。又、新胡麻と柚子を頂戴しました。カミさんはもちろん大喜びでした、

**まあ芳しこんなないつぱい新胡麻を**  
柚子風呂や齢とつぱり忘れをり

異常陽気の寒さです。ご夫妻共々御身大切に佳い新春をお迎えくださるよう念じあげます。ご健吟のほどを不一

（平26.12.22 飯田孝三）

初詣たゞ焼匂ふ烏賊匂ふ  
(彩120号)

平野ひろし

真栄寺にある句碑  
「梅咲いて庭中に青鯫が来て いる」

帽子には帽子のぬくみ寒に入る (リ)  
雪が降る十年振りの雪が降る (リ)  
今年米搗けり宿場の水車小屋 (リ)

平山三郎

奥戸の沖に鳥賊火の一直線（飛行雲75号）  
常盤線生活線なり稻穂る（リ）  
時計台五時を響かせ深む秋（あすか12月号）  
水澄むや御在所跡の玻璃の数（リ）

駿河岳水

こだま（彩主宰平野ひろし&飛行雲主宰駿河岳水無田）

宵闇の粋殻焼く火燃え上がる（白金霞43月号）  
白鷺の百羽を連れて稻刈機（リ）  
初あらし半僧坊をはためかす  
(44号)  
光成高志  
〃 〃

俳窓評論纂

金子兜太の話を聞いた。十二月七日（第一日曜日）は例年の如く、近くの真栄寺に来て俳句の話をする。今年で二十八年目という。私は殆ど出た。いつも一番前で聞く。昨年から本誌を手渡している。今年は車で来られたところに出くわしたので、また名乗つて渡した。いやこりやあどーもと言われて尻のポケットにねじ込まれた。いつも同じような話で私は飽きていたが、今年は少し違つていて良かつたと思ったので、要約を書いてみる。

直覚できなくなるとお陀仏である。私のアニミズム体験は秩父で母が私を十七歳で産んだ少年時代、出戻りの叔母ふたりとその子たちと暮す大家族で育つた。山の漆にかぶれ易い体質で困った。顔や体がかぶれるのは致し方ないとしても、かぶれた手で小便をするから、ちんこ（幼児のそれ、少年になるとちんぽ）、青年ではまら、年をとつて私がうるさいになると、ぎゅうない（爆笑）までかぶれて往生した。これがアニミズムの初体験。なんでも生き物を信仰する。叔母さんが山に連れて行って、漆と結婚すればかぶれない」と仲介をしてくれた。それ以来かぶれなくなった。

昭和の初め現金がない。父親の診察の札に物を持つてき  
てこれで勘弁してくれと言つて、鮎、玉蜀黍、猪の肉、  
榎櫛の木などを持つてくる。ここにもアニミズム信仰が  
仄かに見えた。昭和五年の明治神宮遷座祭に踊りを奉納  
すると言つて唄の文句を作つた。わせだわせだだ、どう  
もろこしは、まらも立たぬのに毛が生えた・・とかこれ  
は金子元春（父）が作つた。祖父は田舎歌舞伎をやつて  
いた。七七七五調の台詞や父の五七五の俳句など記紀歌  
謡の音数律を聞きながら眠つた。父は俳人で医専の同級  
に水原秋桜子がいた。秋桜子は考えたことを俳句にしよ  
うと、自然の真プラス文芸上の真も詠いたいとホトトギ  
スを飛び出した。虚子はそれに対抗して花鳥諷詠論を唱  
えた。昭和六年のこと。思つていることを書けるのはい  
いことだとそれに父も共鳴し、そういう俳人が多かつた。  
「往診の靴の先なる栗拾ふ」がその当時の父の俳句。三  
十代四十代の若い連中が家に集まつて句会をやる。終つ  
たら酒を呑み議論をする。よく喧嘩になる。母は嫁入り  
に持つてきた麵棒を使って餌餉を打つて出す、宴会の対  
応でてんやわんやしていた。俳人は、人非人にんびにんだ。

俳句をやるとああゆう人非人になるから兜太やつちやあ  
いけないよといわれた。しかし、連中には知的野生があ  
つた。知的とはアニミズムには縁遠い。野生にはアニミ  
ズムの素地がある。体で分かつていて、知的野生の人た  
ちがやるものはいいと思った。知的野生、漆体験、記紀  
歌謡この三つに囲まれて大きくなつたのは幸せだつたと  
今思う。高校は水戸に行つた。柔道部に入った。そこで  
出羽三太郎に出会つた。飲み屋では、さんちやんと呼び、  
私は、どうちやんと呼ばれていた。このさんちやんは麻  
布中出で英語が出来た。授業には出ない。代返をしても  
らい落第せずに済んだ。なにをやつていたか。詩を作つ  
たり俳句を作つたりして、投稿をしていた。「白梅や老子  
無心の旅にある」とかいう句を作つていて。こういうの  
を自由人というのだろう。自由人が俳句を作る。又英語  
の先生の長谷川朝暮はエドガーランポーの翻訳をやつて  
いた。全く軍部を無視して夜は俳句をつくり、ペルシャ  
の詩の翻訳をしていた。ウマル・ハイヤームのルバーリ  
ヤートである。享樂主義的な詩である。こういうことを  
恬淡としてやつておられた人で自由人と思う。自由人の  
眞髓はアニミズムに触れてゐるということ、アニミズム  
で生きることが一番いいことだ、一番立派なことだと思  
う。（私はアニミズムで生きることは、もののあはれを知つて生き  
ることと同意識であると思つた。）

\* 小学校五年から中学、高校と同じ学校で付かず離れず  
の学友だつた旧姓大下始子さん、六十五歳の同窓会で俳  
人であることを知り急接近した間柄です。この度、句集  
「白猫」を目出度く上梓され私に贈られました。先ずは

ひと言お祝い申し上げます。俳歴四十年余り、飯田龍太の「雲母」、廣瀬直人の「白露」、現在は井上康明主宰の「郭公」の創刊同人として活躍されています。白金葭に紹介するために急いで私の好きな句を選び少しだけ感想をつけました。

葉隠れに陽が遊びゐる夏帽子

白猫の恋のはじめの闇夜かな

走者曰くゆくさきざきの蟹逃げよ

(郷里で弁慶蟹をよく追っかけました。小道、崖、溝にいて、つ

ぶらん瞳と紅色のハサミが目に浮びます。)

化石ともなれず真昼のこがねむし

(玉虫色の黄金虫が仰向けに死んでいるのは珍しいことではない。目前の黄金虫を見て、化石となつた遺骸を連想できる始子さんはすばらしい。)

ゆく夏の別な谷から十戸見ゆ

蛇笏忌は雲に間遠き谷の音

水音の尖のくらがり鰯雲

吉兆の雪が山から裏口へ

鏡餅湧き水の澄み極まれり

(始子さんのお家は深閑とした山間地だったと思う。俳句のいくつかに、山、谷、水の句があり、佳句が生まれている。山や谷のイメージは蛇笏・龍太に繋がるのかも知れない。)

鳥渡る安芸の入江の小波立ち

春の雁海にほどよきところに住み  
火事ありし日の夕空に初燕  
塩問屋ありあたりの竹落葉  
寺に汲む水の冷たき原爆忌

(瀬戸内海に面した温暖な安芸の国に生まれ育ち、現在も住み続け、郷土を愛されていて、しっかりと俳句に残されている始子さんです。他にも好きな句は書ききれないほどあります。あなたの喜びは私の喜びです。幸せな年末となりました。)

(12. 23 光みち)

## 旅のうたを読む X 一三好達治

武者昭七

旅人よ旅人よ

路をいそげと

海辺をくれば

浪の音

野末をゆけば

蝉の声

山路となれば

啄木の歌

旅人・「山家集」

まるで悲哀に急き立てられるように、あるいは寂寥に追い立てられるように、海辺を過ぎ、野末を行き、山路をたどる旅人の吐息が聞こえてくる。この詩を読むたびに僕は「測量船」に収められた「峠」という詩の一節を思い出す。

「私は注意深く煙草の火を消した。午後ははや少し遅くなつてゐた。そしてこの、恐らくは行き会ふ人もないだらう行く手を思ひ、草深い不案内な降り路を考へると、人の誰からも遠く離れ

た私の自由な時間も、やはりあわただしく立ちあがらなければならぬのを味気なく感じた。既に旅の日数は重なつてゐた。私は旅情に病の如き悲哀を感じてゐた。しかし私にあつて今日旅を行く心は、ただ左右の風物に身を託して行く行く季節を謳つた古人の心でなければならない。もうすぐに海が見えるであろう。それなのに私の心の、何と秋に痛み易いことか！」

作者は「旅の時間を鳥のやうな自由な時間」とい的ながらも焦燥の思いにとらえられ「やはりあわただしくたあがらなければならぬ」と思う。そして「旅情に病の如き悲哀を感じ」ながらも「旅ゆく心はあの古人の心でなければならない」と自らに言い聞かせる。古人とは西行であり宗祇であり芭蕉たちであろう。そびえたつ霊峰のごとき存在！彼らの心のなんと健康であり骨太であるとか。作者はそれを十分に知つてゐる。だから言う「それだのに私の心のなんと・・・！」と。

三好の旅は決して彼らにつながるものではなかつた。感傷過多と言われるほどにかれのこころは傷つきやすかつたし寂しさに覆われていた。(2014・06・15)

## 芭蕉の軽み以後 (36)

光成高志

寛文十二年に江戸へ下る二十九歳の時出版した『貝おほひ』は、それまでに積み上げた学問を突き破り時代の風潮も取り込んだ晩年に唱える軽みを持った俳諧本とな

つてゐる。芭蕉自身は軽みには無意識であつたであろう。それは二十代に学んだ貞門風に物足りないものを感じて、談林風などを先取りした傾向があつた。江戸へ出てから、桃青と名乗り、延宝年間は宗因歓迎の百韻に一座するなどして宗因を大いに贊美した。古典文学を踏まえたり諧曲の言葉をはめ込んだり縁語・掛詞を使い常識をひつくり返す寓言などを自在に使つて発句を作るのは、それなりの学問的蓄積が必要であるが、更にそれを才氣煥発に導き出す才能があつて十分となるのであつて、延宝年間の桃青はこの必要十分条件を備えた只一人の俳諧師であつたのだ。延宝四年に帰郷し、その秋江戸に戻つてから、桃青の談林俳諧が活発になつた。延宝五年の「六百番俳諧発句合」(風虎編)、同六年「江戸通り町」(二葉子編)、同年「江戸広小路」(不ト編)、同年「江戸新道」(言水編)、同七年「江戸蛇之鮀」(言水編)などに桃青の発句が発表されて、江戸俳壇では名が通るようになつてゐた。新井白石は芭蕉より十三歳遅れて生れた江戸中期の学者であるが、この頃牢人をしていて俳諧にも凝つていた。自伝『折たく柴の記』には一言も書いていないが、室鳩巣の書簡集「兼山秘策」の中に桃青などと競りあつた、桃青も歌人にて、李白を学び候て桃青とつけ申候由に御座候と書かれてあることから見てもそのことが分る。延宝八年の冬に日本橋から深川に隠棲した。隠棲

と言つたつて、弟子達の援助があつたので、移住と言うべきであるが、それまでの桃青の俳諧活動・作品をよく吟味することが移住の理由に触れるのではないかと思う。延宝五年の正月は門松の句を作つたのであるが、春の句として、一休和尚が比叡の山法師どもから読みやすい大文字を所望されて、金堂から麓の坂本まで紙を継がせて、真直ぐに「し」の字を書きながら駆け下りたという笑話(『一休ばなし』)によつて大比叡やしの字を引いて一霞(霞)という句を作つてゐる。一休和尚の縦に引くしの字を横に一文字に引いた感じに大比叡に霞が横に長くかかるつてゐるというのである。

猫の妻竈(へひ)の崩れより通ひけり(猫妻恋) 桃青

昔男の業平は築地の崩れから忍び通いをしたが、猫はやつぱり猫。恋猫となれば、発情した雌猫が雄猫を求めて、築地ならぬ竈の崩れから通つてくる。伊勢物語の場面を男女逆転させて俗にもじつてゐる。

古事記伝の版本立てかけ冬温し  
\*2 笑門の注連縄飾る大台町  
山煙の伊勢茶畑に時雨降る  
参道の真中に寄せる落葉搔き  
夕日差す参道脇の松落葉  
神鷦の足に環を嵌め落葉踏む  
寸劇を見せる義士の日の六年生  
義士の日や七十七逝の墓碑  
香煙や学童語る義士銘々伝

高志みち 高志みち 一艸人 // 高志みち 高志みち 政子良子敏子

編集後記

「彩」の誓子慕情《86》筒井不学さんの文をもつともゝと言いながら読んでいます。今回も同感、久野哲男氏の「山口誓子覚書」を引用しての論、痛快です。青江由紀夫さんの銀次郎日記快調です。良いお年をお迎え下さい。来年もよろしくお願ひします。スペースなくこれだけの後記です。

我孫子日記

11 / 21 例会。	11 / 26 S O A.	11 / 30 * 松坂。	12 / 1 * 2 三瀬谷
↓伊勢神宮。 12 / 5 銀座→泉岳寺。 12 / 7 真栄寺。 12 / 9 手			
賀沼。 12 / 12 * 3 萱吟行句会 (泉岳寺)。 12 / 19 例会。			
* 鈴屋の遺蹟は銀杏黄葉照る			

高志

白金霞 第46号  
FAX 04-7187-1068 平成26年12月発行 編集発行人 光成高志(TEL&  
表紙の題字 加納綾女。写真は 12月25日の白金霞 発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-1  
1